

宗教の世俗的側面としての経営

宗教活動を通じて生計を立てる宗教者を宗教家と呼ぶ（前号参照）。そこでは、好むと好まざるとに関わらず、宗教家稼業あるいは宗教組織経営という世俗的な側面が出てくる。宗教組織が他のさまざまな組織と異なるのは、中心に指導力をもった宗教的人格が存在し、信者の内面生活に深く関わる宗教的諸活動を通じて、その経営がなされることである。

キリスト教（プロテスタント）の場合、各教会の礼拝や諸行事の運営などの宗教的活動は、個々の牧師の自由と裁量にまかされている。同じキリスト教でも、ミサの儀式が中心のカトリックとは異なり、礼拝では説教が中心なので、牧師の個性や魅力に大きく左右される側面がある。500人以上の信徒を集めるのは、カリスマ型教会と言われる。逆にそうした牧師が引退したりすると、人々の足は教会から離れ、教勢は衰えてしまう。カリスマ的資質は個人に属するもので、これをそのまま後継させることは不可能だからである。

戒能信生牧師によれば、たとえ教会がカリスマ型の指導者によって一時的に大きな勢力を持ったとしても、およそ30年の周期で普通の教会になっているという（弓山達也編『現代における宗教者の育成』、大正大学出版会、96頁）。そこで、単立が可能なカリスマ型教会でも、高い負担金を払って教団に所属しているのである。力のある牧師が今は自らのカリスマ的指導力でやっていけても、教師養成あるいは次の世代の指導者養成では不安を感じているからである。自分一代限りで終わらせず、組織として存続するために、教団に所属して存立基盤を安定させているわけである。それは、個人商店がフランチャイズの系列店として生き残りをはかる戦略と似ている。全国展開するフランチャイズチェーンであればあるほど、ブランド力や組織経営のノウハウを持っているし、より有能な人材もそこから供給することができるのである。

ところが、教団組織に包括されると、今度はその教団としての方針に反することができなくなってくるという難点が起こってくる。教団所属はいわば両刃の剣である。カリスマ的牧師がそのカリスマ的資質の故に、教団の正統な教理から逸脱した教えを説いたり、あまりに独自の活動を展開したりすると、教団側から“指導”が入る。それに従わない場合は“異端”とみなされ、所属を解消させられることにもなりかねない。フランチャイズ本店の権限や力が強ければ強いほど、系列店の店長の自由や裁量が制限される傾向はどうしても生じてくるのである。

活動単位は単体の宗教施設で

4月3日に関西学院大学梅田キャンパスにて、宗教社会学の会主催による『社会貢献する宗教』（稲場圭信・櫻井義秀編、世界思想社）の書評セッションが行われ、私も関西学院大学の対馬路人教授、浄土宗應典院の秋田光彦住職とともに書評者として参加した。

そのときの話題の一つになったのは、宗教が社会貢献活動する単位は、宗教教団のレベルではなく、単体としての個々の宗教施設であるべきではないかというものだった。信者であるなしに関わらず、宗教家が一人ひとりの人間と触れあい、その心

魂に関わるための場合は、教団全体ではなく、お互いに顔の見える個々の宗教施設のほうがかはるかに効果的だ。これを強調した秋田住職は、自らの應典院を地域創造の拠点として再生させ、寺院の社会的起業を成功させた宗教家である。人と人を巧みにつなぎ、寺を各種のアートやイベントの場とし、檀家無しの都市寺院として活性化させた成功者の発言だけに、確かに説得力を感じさせるものだった。

伝統宗教も新宗教もそれぞれの仕方では教団組織を有している。我が国の伝統宗教、つまり仏教の各宗門教団では、本部（本山）としての権限や力はそれほどでもないため、各寺院で住職が独自の裁量や主体性を持って活動を展開することができる。これに対して、新宗教の諸教団が被包括の宗教施設（教会、布教所）に対して有する縛り^{しば}は強い。秋田住職が應典院の試みに成功した一因も、伝統宗教ゆえに、浄土宗本山と距離を置いた独自路線を取りやすかったからでもある。

単体としての宗教施設が対社会的な関わり単位となるべきだというのは、これからの宗教の生き残りを考える重要なポイントでもある。新宗教の場合も、各宗教施設の主体的な活動を促進するために、教団本部の縛りをほどほどのところで緩めたほうが良いのではないか。そうでないと、フランチャイズチェーンでよく問題になるように、中央の本部ばかり栄えて地域の店舗が疲れ切ってしまうのと同様な状態になりかねないのである。

宗教らしい発想の転換を

言うまでもないことが、秋田氏の應典院はあくまで参照すべき一事例であり、どの宗教施設もそれを真似することはできない。むしろ、それ以外のさまざまな経営モデルを、宗教家一人ひとりが考えて、自分なりのやり方で取り組むべきである。小さな宗教施設は逆にその小さきところを生かして、身の丈にあった活動を考えなければならない。

私は以前に“会員制クラブ”型の宗教を提唱したが（本誌2009年11月号「がんばるのをやめよう、宗教から」参照）、これも一つの小規模宗教施設のあり方である。会員制のクラブでは何より雰囲気^{あまじ}が大切であって、それを店主と顧客が協働して作り上げているように、小さな宗教施設においても宗教家と信者とのコラボレーションが求められる。その一方で、ふと扉を開けて入る未知の人との新たな出会いもあり、決して目立ちはしないけれども、見えない絆によるネットワークを形成している。それは、人と人を結びつける縁の結節点なのだ。人の縁が融通無碍であるように、宗教施設の経営も融通無碍であって良い。

人間の社会には栄枯盛衰があって当然である。冬の間は冬眠して春になれば活動を再開する動物のように、しばらく看板を下ろす時期があっても、時が来れば新しい場所で新しい看板を掲げていけば良いではないか。とくに小規模な宗教施設の経営に求められるのは、社会の動きに柔軟に対応する姿勢である。

ここで、宗教らしい発想の転換を提案したい。宗教家は宗教組織の存続にこだわるのを思いきって止めて、むしろ今・ここで自ら為すべき活動にこそ徹してはどうだろうか。そのほうがより宗教家らしい生き方であるし、実はそこから次代への真の活路も開かれてくると信じるからである。